

文 献 紹 介

岐阜県大垣市教育委員会編：

『大垣市遺跡詳細分布調査報告書 解説編』

大垣市教育委員会文化部発行 1997年3月

A4版 224 ページ 定価5000円

本書は、1994年に発行された『新版 大垣市遺跡地図』の解説書である。すでに、「地理学評論」72-2号(1999年2月発行号)において、正井泰夫氏が簡潔にして要点を押さえた書評を書かれている。概説的に紹介すべき点の大半は正井氏が紹介されている。重複を避けるためにも、あえて評者の個人的な興味・関心に引き付けて本書をご紹介し、本来お書きになる予定であった服部昌之前会長の代役の重責の一端を果たすこととしたい。

解説の前提として、4本の柱(自然地理学的調査・歴史地理学的調査・人文地理学的調査・考古学的調査)を立てて、調査・検討がなされている。

まず、自然地理学的調査(第2章)においては、多様な事例と多くのデータ、さらにはカラーの図版が駆使されており、大垣市内の自然的な環境や景観がまさに変化してきたことを実感できる。「現在の地表面は過去の姿そのものを示すわけでは決してない。……さまざまな方法を用いて地下の様子を探り、当時の景(人びとの生活の場)を的確に描き出す必要がある。」との日下雅義氏の提言を、文字通り実践されたものである。

特に、立体的に描き出された最終氷期最盛期から中世～近世に及ぶ、11枚のカラーの濃尾平野の地形環境復原図は、自然環境が不変ではないことを眼前に示してくれる。各図の解説文はいずれも興味深いものであるが、10世紀末から12世紀初頭の間形成されたと想定されている(高橋 学氏)「完新世段丘Ⅱ面」の形成時期がさらに絞り込まれる日を鶴首して待ちたい。

歴史地理学的調査(第3章)においては、地籍図と絵図類の基礎的な調査・検討を経て、大垣市内の小学図を編集し、市内の条里地割の復原、東大寺領大井荘の比定、各城下町の復原と比定に力点を置いている。

特に、大井荘の四至の比定に関して、足利健亮氏は、1989年の『大垣市遺跡詳細分布調査概要報告書(Ⅰ)』の中で述べられた自説さえも訂正し、現在の地図上における正確な位置の確定をほぼ達成されている。

ただし、評者としては、四至の確定とともに、1条1里1坪にはじまる大井荘独自の条里坪付に再編された、永仁3年(1295)の「実検馬上取帳案」と条里地割の内実をさらに明らかにしてほしかった。特に、4条1里1坪の「6町3反60歩」の地積をはじめとして、1町を越える坪が荘内の103坪(28%)にも及んでおり、その実態の解明を期待したい。「大井荘域一帯の条里地割がかなり整生を欠く施工状態であったことを物語る。……これは地形条件によるものであろう。」との一文では十分理解できない頗る大きな問題を含んでいると判断される。

人文地理学的調査(第4章)に関しては、伊藤安男氏を中心として、輪中はもとより、水屋と堀田に関する頗る貴重な悉皆調査を実施されている。特に、現存する水屋(231棟)とともに、取り壊されてすでに消滅した水屋(190棟)まで含めた悉皆調査は全くはじめてであり、その分布図とともに、153～154pにまとめられた水屋の詳細なデータは貴重である。また、輪中型土地利用とも言うべき堀田に関しても、土地改良事業によって埋立てられて完全に消滅したが、明治期の地籍図と1947年の米軍撮影の空中写真などを利用して、近世以来の歴史的な開発の経緯を検討しつつ、詳細な復原図を作成されている。

本書を通読して、大垣市の文化財行政に対する懐の深さに敬意を抱き、それを受けて8年間に及ぶ真摯な調査を続行され、かように中身の濃い解説編を執筆された諸氏に羨望の念を禁じ得ない。

単なる「遺跡分布図」の解説編ではなく、地理学の各分野を文字通りリードする諸氏が、長期間にわたる悉皆調査と検討を続けられ、各分野が重要と判断されたテーマに絞りつつ、現段階で望み得る最良レベルの復原と検討がなされている。

解説文の中には、明らかにし得た成果とともに、上記において若干述べたように、これからの検討課題も開陳されており、様々な角度から読み解くことが可能である。

第6章には、「調査の展望」と題して調査終了後の座談会の記録がまとめられている。8年にも及んだ調査の成果と課題が、各氏の口からストレートに語られており、これまた味読に値する座談会記録となっている。(伊藤寿和)